

『古今著聞集』 卷第五「和歌第六」を読む(4)

谷 知子(代表者)
久利若系・佐藤洋美・渡邊 静

本稿は、宮内庁書陵部蔵『古今著聞集』巻第五「和歌第六」二〇〇～二一〇を大学院演習にて講読した注釈ノートである。現代語訳・語釈・解説を施した。各箇所を担当は、二〇〇・二〇四①・二〇七谷知子(本学教授)、二〇三①・二〇四②・二〇八久利若系(人文科学研究科日本文学専攻博士前期課程)、二〇一・二〇三②・二〇五・二一〇佐藤洋美(人文科学研究科日本文学専攻博士前期課程)、二〇二・二〇三③・二〇六渡邊静(人文科学研究科日本文学専攻博士前期課程)である。

二〇〇 河内重如、自ら女房のもとに行きて艶歌をおくる事

〔本文〕

河内重如をば、山の次郎判官代と申しけり。その品賤しきものなりけるが、われより高き女房を思ひかけて、艶書をてづから持ちてゆきてんげり。

人づてはちりもやすと思ふまにわれが使にわれは来つるぞ

女めでてしたがひけり。この人、河内より夜ごとに住の江にゆきて夜を明かしけり。いみじきすき者にてぞありける。死ぬるとも歌をよみてんげり。

たゆみなく心をかくる阿弥陀仏人やりならぬ誓ひたがふな

〔現代語訳〕

河内重如を、山の次郎判官代と称していた。その身分は低い者であったが、自分より身分の高い女房に恋慕して、艶書を自ら持っていた。

人伝てでは中身が人に知られてしまいかもしれないと思つているので、私の使いとして私自身が来たことですよ。

女は感心して（重如を）受け入れた。この人（重如）は、河内国より毎夜住の江に行つて夜を明かした。すばらしい奇奇者であった。死ぬ間際にも歌を詠んだのであった。

たゆむことなく願をかけている阿弥陀仏よ。あなた様ご自身がお立てになった誓願を違えなideてください。

〔語釈〕

○河内重如 生没年未詳。河内国人（『和歌色葉』）、河内守（『俊頼髓腦』）とされる。『後拾遺集』初出。○山の次郎判官代 「山」は山口の略。「山口重如也。号河内重如也、河内国人也」（『金葉集勸物』）。「判官代」は院庁の判官。

○その品賤しきもの 『勅撰作者部類』は六位とする。○艶書 恋文。○人づてはちりもやすと思ふまにわれが使にわれは来つるぞ 未詳。『教長集』に「蔵従者恋」という題で「ことのははちりもやするとこひしさを人づてにて

はいひもやられず」という例がある。○河内 河内国。重如の住居のある地。○住の江 摂津国。和歌の神として崇拜された。○すぎ者 俗事から離れて、風流事に執着し、熱中する行為。○たゆみなく心をかくる阿弥陀仏人やりならぬ誓ひたがふな 『金葉集』雑下・六四六に入集。作者名は「田口重如」、詞書は「かくてつひにおちいるとよめる」。「田口」は「山口」の誤伝である。「人やりならぬ誓ひ」は、「欲生我国不果遂不取正覚」(『無量寿経』)による。西方浄土に導く誓い。

〔解説〕

1、歌集に収められた重如の和歌

住吉の宮うつりの日かきつけ侍ける

住吉の松さへかはるものならばなにか昔のしるしならまし

(後拾遺集・俳諧・一一六七・山口重如)

人のもとに侍りけるにはかに絶えいり失せなんとしければ、薨のもとに入れておほちにおきたりけるに草の露の足にさはりける程にほととぎすのなきければ、息のしたに

草の葉にかどではしたりほととぎす死出の山路もかくや露けき

かくてつひにおちいるとよめる

たゆみなく心をかくる阿弥陀仏ひとやりならぬ誓ひたがふな

(金葉集・雑下・六三七・田口重如)

河内にくだりて日々侍りける人ののぼらむとしける時、君をおきてかへる空なきよしなどいへりける返事に心をば君にたぐふる旅なればわれもとどまるこちやはする

(続詞花集・別・六八九・山口重如、新統古今集・離別・八九九)

題不知

行末も見えぬふなちのかなしきはなみのなかにぞいる心ちする

(続詞花集・旅・七二八・山口重如)

暗夜尋梅花

くらければ色こそ見えね梅花有りとばかりはしらぬるかな

(和歌一字抄・山口重如)

*参考

極楽のはちすの花のうへにこそ露の我が身はおかまほしけれ

(新統古今集・釈教・四六六・山口重如女)

2、同話収載書

『俊頼髓脳』『袋草紙』上巻・『十訓抄』第十に同話が、『宝物集』に「たゆみなく」の歌にまつわる話が載せられている

(谷 知子)

二〇一 和泉式部田刈る童に襖を借る事并びに同童式部に歌を贈る事

〔本文〕

和泉式部のびて稻荷へまいりけるに、田中明神の程にて時雨のしけるに、いかゞすべきと思けるに、田かりける童の、あをといふ物をかりてきてまいりにけり。下向の程にはれにければ、此あを、かへしとらせてけり。さて次日、式部はしのかたをみいだしてゐたりけるに、大やかなる童の、文もちてた、ずみければ、「あれはなに物ぞ」といへば、「此御ふみまいらせ候はん」といひて、さしをきたるを、ひろげてみれば、

しぐれするいなりの山のみみぢ葉は青かりしより思ひそめてき

とかきたりけり。式部あはれと思て、このわらはをよびて、「おくへ」といひて、よびいれけるとなむ。

〔現代語訳〕

和泉式部がお忍びで稻荷へ参詣したとき、田中明神のあたりで時雨に降られたため、どうしようかと思つていたところ、田を刈る童の、襖というものを借りてきて(稻荷に)参詣した。下向のころには晴れていたなので、この襖を返

させたのであった。その次の日、式部が部屋の中から庭につながる階段を見て座っていたところに、大柄な童が、手紙を持ってたたずんでいたのので、「そなたは何者ですか」と言うと、「此の御手紙を差し上げたいのです」と言って、差し出して置いたのを、広げて見てみると、

時雨の降る稲荷山の紅葉をまだ青かった頃から心にかけて始めていたのと同じように、襖をお借りになったときからあなたを恋いはじめたことでした

と書いてあった。式部は心動かされて、この童を呼んで、「奥へ入りなさい」と言って、呼びいれたという。

〔語釈〕

○和泉式部 生没年未詳。平安時代中期の女流歌人。父は越前守大江雅致、母は越中守平保衡の女。和泉守橘道貞に嫁し、小式部を生むが離婚。為尊親王や敦道親王との間にも恋愛関係が生じたが、ともに死別。その後、中宮彰子に仕え、藤原保昌と再婚して、夫が丹波守に任せられると、同国へも下った。三十六歌仙の一人。家集に『和泉式部集』、『和泉式部日記』がある。↓一七四(『フェリス女学院大学文学部紀要』第四八号、二〇一三年三月)。○稻荷 伏見稲荷大社。もとは稲荷山に、下社・中社・上社の三社があったが、のちに田中大神と四大神とが奉祀されて五社となった。また、「そもそも、稲荷神は「福徳敬愛ノ御本誓」をうたう神であり(『稲荷記』)、稲荷参詣の行列のなかには、つれない女を振り向かせたい男や冷えきった夫の愛を取り戻したい女などが連なっていた」と指摘されており(田中貴子『性愛の日本中世』洋泉社、一九九七年一二月)、恋愛の絡む説話の舞台となるのにふさわしい場所であった。

○田中明神 京都市東山区本町にある田中神社。伏見街道に面し、京から稲荷大社への街道筋にあたる。○あを 茅・菅・藁などで編んだ雨をしのぐ蓑の類をいうか。『袋草紙』では「道にあへりける牛飼童の襖をぬぎて着せたりける」とある。○下向 神仏に参詣して帰ること。○はし 階。きざはし。庭から屋内に昇る段。○しぐれするいなりの山 のもみぢ葉は青かりしより思ひそめてぎ 「あをかりし」は「襖借りし」と「青かりし」、「そめ」は「初め」と「染め」の掛詞。『袋草紙』静嘉堂文庫本と日本歌学大系本では、初句「しぐれする」が「しぐれふる」とされる(『袋草紙考

証)。

〔解説〕

本説話は『袋草紙』上巻、『十訓抄』十、『沙石集』五下に類話が載せられている。〔語釈〕に指摘したように、『袋草紙』では襖を借りた童について「道にあへりける牛飼童の襖をぬぎて着せたりける」と記され、また、『沙石集』五下には「式部あはれと思て」以下がない。

和泉式部は、平安中期の女性歌人として著名であるが、歌徳説話といえる説話が複数のこされている。『古今著聞集』「一七四 和泉式部貴布禰社に詣でて詠歌の事」には次のように記される。

和泉式部おとこのかれがれに成ける比、貴布禰にまうでたるに、螢のとぶをみて、

物思へば澤のほたるも我身よりあくがれ出る玉かとぞみる

とよめりければ、御社のうちに忍たる御聲にて、

おく山にたぎりておつる瀧つ瀬の玉ちるばかりものな思そ

其しるしありけるとぞ。

夫の来訪が途絶えがちになっていたことから和泉式部が貴船神社に参詣し、飛んでいた螢に自らの魂をなぞらえた歌を詠むと、神からの示験があったという。

さらに、この説話の派生として『沙石集』(巻第十末ノ十二)では、和泉式部が歌を詠むことによって夫保昌の愛を取り戻す話が記されている。和泉式部が貴船神社で敬愛の祭を執り行わせたところ、保昌がそれを聞きつけて見に来ており、その前で巫女が着物の前をかき上げて叩きながら三回まわった。巫女は和泉式部にも同じようにするよう勧めたが、和泉式部はその言葉には従わずに「ちはやぶる神の見る目も恥しや身を思ふとて身をや捨つべき」という歌を詠む。そのような和泉式部の様子をみた保昌は「これに候ふ」と言つて式部を連れ帰り、愛情がさらに深まったという。

このように和泉式部は和歌を詠むことよつて物事を好転させていくことがあつたが、その力は好色的なふるまいをするときにも発揮された。『沙石集』(巻第五末ノ二)には次のような説話がある。

和泉式部は、好色の美人なりけるが、道命阿闍梨、貴き聞こえ有りて、法輪寺の辺りに、庵室して、如法に行じけるを、夜ひそかに行きて、墮とさむとて、戸を叩きけれども、心得て、音せざりければ、かく云ひかけて帰りける。

寂寞の苔の岩戸をたたけども無人声にて人も音せず

かせ山と云う山寺に、参籠して行ひけるを、行きて、兩三日うかがひ寄りて、云ひやりける。

都出でて今日みかの原いづみ河河風寒し衣かせ山

この歌にめでで墮ちにけり。

和泉式部は、高德な僧として知られる道命阿闍梨を墮とそうと山籠もりしている庵室に近づき、歌を詠みかけた。すると道命阿闍梨は心魅かれて女色に墮ちてしまったのだという。

『古今著聞集』二〇一は、歌によつて人の心を動かす和泉式部が、卑賤な男に詠みかけられた歌によつて心動かされた説話として注目されたい。(佐藤洋美)

二〇二 宇治入道、顯輔の秀歌に感じてその侍女を遣はず事

〔本文〕

宇治入道殿にさぶらひける、うれしさといふはした物を、顯輔卿けさふせられけるに、つれなかりければ、つかはしける、

われといへばつらくもあるかうれしきは人にしたがふ名にこそありけれ
入道殿きかせ給て、「秀歌に返事なし。とくゆけ」とて、つかはしけり。

〔現代語訳〕

宇治入道殿にお仕えしていた「うれしき」という雑仕女に、顯輔卿が想いを寄せたが、冷たく素知らぬ態度だったので、詠んで送った(歌)、

私のことという、あなたは冷たくするのか。「うれしき」という名は私以外に使う名だったのだから

入道殿が(これを)お聞きになって、「秀歌には返事は無用だ。急いで行け」といって、(女を顯輔のもとに)おやりになったということである。

〔語釈〕

○宇治入道殿 藤原師実か。長久三年(一〇四二)生、康和三年(一一〇一)没。通称は京極関白、後に宇治殿。堀河天皇の外祖父、太政大臣、摂政、関白。家集に『京極前関白集』がある。顯輔と同年代であるとすれば、子の忠実がふさわしい。○はしたもの 雑仕女。召使の女。端物。○顯輔卿 藤原顯輔。寛治四年(一〇九〇)生、久寿二年(一一五五)没。歌道六条家二代目当主。左京大夫、皇太后宮亮などを経て正三位に至る。晩年は崇徳院の命を受けて、『詞花集』を撰ぶ。家集に『左京大夫顯輔卿集』がある。師実の生存年代からすれば、顯輔の父顯季(一〇五五〜一一二三)がふさわしい。○けさふ 懸想。思いを寄せる。○われといへばつらくもあるかうれしきは人にしたがふ名にこそありけれ 『拾遺集』卷一九の藤原長能の歌「我といえは稲荷の神もつらきかな人のためとは祈らざりしを」を踏まえる。二句末「あるか」が『十訓抄』『沙石集』では「あるかな」になっている。

〔解説〕

同話取載書

『沙石集』巻第五、『十訓抄』第十に同話が載せられている。

(渡邊 静)

二〇三 前大宮大進清輔和歌の尚齒会を行ふ事①

〔本文〕

承安二年三月十九日、前大宮大進清輔朝臣、宝莊殿院にて和歌の尚齒会を行けり。七叟散位敦頼八十四・神祇伯頭広王七十八・日吉禰宜成仲宿祢七十四・式部大輔永範七十一・右京権大夫頼政朝臣六十九・清輔朝臣六十九・前式部少輔維光朝臣六十三。清輔朝臣仮名序かきたりけり。敦頼衣冠に桜のあつぎぬ三をいだして、鳩杖をつきて、久利皮の沓をはきたり。清輔朝臣は布袴をぞきたりける。進退のあひだ、大式重家脚裾をとり、皇后宮亮季経朝臣沓をはかせけり。兩人清輔朝臣が弟なれども、座次の上臆にてありけるに、このかみをたうとみて、ふかく此の礼ありけり。悦にたへず、後日に父頭輔卿、子孫の中にこの道にたへたりとて、清輔朝臣に伝たりける人丸影・破子硯を、重家朝臣息中務権大輔経家朝臣に譲られけり。和歌の文書、季経朝臣に譲てけり。すべて尚齒会おほくは詩会にこそ侍に、和歌はめづらしき事也。上古に一度ありけるよし、其時も沙汰ありけれども、たしかならぬ事にや。その日の日記に侍けるは、池の水千とせの色をたへ、いはの苔万代をへたるけしき也。

〔現代語訳〕

承安二(一一七二)年三月十九日、前大宮大進清輔朝臣が、宝莊殿院において和歌の尚齒会を行った。七人の老人たちの面々は、八十四歳の散位敦頼・七十八歳の神祇伯頭広王・七十四歳の日吉禰宜成仲宿祢・七十一歳の式部大輔永範・六十九歳の右京権大夫頼政朝臣・六十九歳の清輔朝臣そして六十三歳の前式部少輔維光朝臣といったものである。催しの趣旨を表す仮名書きの序文は、清輔が書いた。敦頼は衣冠姿に若々しい桜襲の綿入れを三枚ほど少し裾から出し、長寿を祝って下賜された鳩杖について、祭礼の際の黒い鳥皮(くりかわ)の沓を履いていた。清輔は布袴を着ていた。席に着くまでの間、異母弟の大式重家が清輔の裾を持ち、もう一人の弟・皇后宮亮季経が彼に靴を履かせてやった。二人とも清輔の弟であるが、座順は位階によって上位であったにもかかわらず、この兄を敬ってこのような深い礼を尽くした。清輔は悦びに堪えず、かつて父頭輔卿に、子孫の中で歌道に堪能であるとして譲り伝えられた

柿本人麻呂の影像と破子の硯を、後日重家の子中務権大輔経家に譲り、また歌道書を季経に譲ったのだった。

我が国のすべての尚齒会は、ほとんど漢詩を披講する会であるというから、和歌で尚齒会を行うのは珍しいことだ。上古時代に一度行われたというが、その時の記録はあっても、確かなことかどうかはわからない(確かではないことではないだろうか)。その日の仮名序に書かれたことは、「池の水は千年の時を経たような深々とした色を湛え、岩に生えた苔は万年を経たかのごとく趣ある様子である」。

【語釈】

○尚齒会 七人の老人が集まって酒を飲み詩歌を作り、音楽を奏して楽しむ会のこと。○宝莊嚴院 鳥羽院が白河の大炊御門前に建立した御願寺。鎌倉期に火災などによって衰退した。○前大宮大進清輔 藤原清輔。長治元年(一一〇四)生。治承元年(一一七七)没。父は非参議正三位左京大夫顕輔。母は高階氏。弟たちと比べて官位の昇進は遅く、四十八歳でようやく従五位下になり、正四位下で終わったが、歌人としては恵まれ、関白九条兼実家の歌会を指導し、弟たちにも慕われた。『奥義書』『和歌一字抄』『牧笛記』『袋草紙』などを執筆。『千載集』以下の勅撰集に八十九首入集。○散位敦頼 藤原敦頼。寛治四年(一一九〇)生。治承三年(一一七九)以降没。道因法師の名で有名。左馬助とも呼ばれた。撰集に『現存集』、歌集に『樗散集』があったようだが散失。『万葉集』に訓点を試みることもしている。『千載集』以下の勅撰集に四十一首入集。○神祇伯顕広王 顕広王。嘉保二年(一一九五)生。治承四年(一一八〇)没。花山源氏。神祇伯を世襲する白川家の祖。日記に『顕広王記』がある。○日吉禰宜成仲 祝部成仲。康和元年(一一九九)生。建久二年(一一九一)没。後白河院の北面の武士を経て日吉神社の禰宜となる。長寿のため、七十賀・八十賀・九十賀まで行い、重家らと交流している。『詞花集』以下の勅撰集に三十一首入集され、家集に『成仲集』がある。○式部大輔永範 藤原永範。康和二年(一一〇〇)生。治承四年(一一八〇)没。文章博士で後に宮内卿。後白河・二条・高倉天皇の三代の侍読を務める。漢詩人としても知られており、『千載集』以下の勅撰集に九首入集。○右京権大夫頼政 源頼政。長治元年(一一〇四)生。治承四年(一一八〇)没。清和源氏で、

頼光を始祖とする摂津源氏の棟梁。武勇にも秀で、平清盛と近しくなることで従三位に叙されて「源三位」と呼ばれる。『詞花集』以下の勅撰集に六十一首入集され、家集『源三位頼政集』を編む。後年以仁王の乱に加担し、敗死した。

○前式部少輔維光 大江維光。康和二年(一一一〇)生。安元元年(一一七五)没。大江匡房の孫に当たり、紀伝道の大家と仰がれた。○布袴 ほうこ。束帯に次ぐ礼装。束帯の大口(おおぐち)、表袴(うえのはかま)に替えて下袴、指貫を着用する。○大式重家 藤原重家。大治三年(一一二八)生。治承四年(一一八〇)没。本名は光輔。父は非参議正三位左京大夫顕輔。母は家の女房。兄弟に清輔・顕昭・季経、子に経家・顕家・有家がいる。『千載集』以下の勅撰集に二十九首入集され、家集に自撰の『重家集』がある。○皇后宮亮季経 藤原季経。天承元年(一一三一)生。上級三年(一一二二)没。法名は蓮経。重家の同母弟。『千載集』以下の勅撰集に二十一首が入集、家集に『季経入道集』。○顕輔 藤原顕輔。寛治四年(一一九〇)生。久寿二年(一一五五)没。号は六条。父は修理大夫顕季、母は藤原経平の娘。清輔らの父。崇徳上皇の下命によって『詞花和歌集』を撰進した。『金葉集』以下の勅撰集に八十四首入集され、家集に『左京大夫顕輔卿集』がある。○中務権大輔経家 藤原経家。久安五年(一一四九)生。承元三年(一一〇九)没。重家の嫡男。『千載集』以後の勅撰集に入集、家集に『経家卿集』。

【解説】

ここでは尚齒会のことについて詳しく触れる。『古今著聞集』には、白楽天が会昌五年(八四五)に洛陽の履道坊で行ったのが初めて、日本では貞観十九(八七七)年に正三位大納言南淵年名が小野山荘で開いたとされ、安和二(九六九)年に右大臣藤原在衡が粟田山荘で催したという逸話が残っている。また、天承元年(一一三二)、藤原宗忠が白河山荘にて、自身と三善為康・藤原基俊・中原広俊・藤原敦光・藤原実光・菅原時登らで詩歌管弦の集いを愉しんでいる様子が、「本朝無題詩」に残っている(巻四・第一二一段「尚齒会の起源と天承元年三月藤原宗忠の尚齒会的事」)。

本来は春の暮れに行われ、七言六韻の漢詩を披講するというものだったが、このエピソードにある承安二年の宝莊

嚴院尚齒会において、はじめて和歌が披露されたことが、「暮春白河尚齒会和歌并序」(群書類従五三〇)によって知られる。その後は養和二年に賀茂神主重保が開催し、俊恵法師らが参加したが、次第に衰退していき、大々的なものは行われなくなっていた。だが、その伝統は細々ではあるが江戸期まで続いていたようで、江戸の文人の間で詩歌や俳句を披露した尚齒会が行われていたという。『和歌大辞典』(犬養廉・井上宗雄編 明治書院 一九八六年)『平安後期歌人伝の研究』(井上宗雄著 笠間書院 一九七八年)参照。

(久利若糸)

二〇三② 前大宮大進清輔和歌の尚齒會を行ふ事②

〔本文〕

梢の花落つきにければ、庭の面には春猶のこれりとみゆるばかりありて、清輔朝臣誦ける、

かぞふれどとまらぬ物をとしといひてことしはいたく老ぞしにける

又誦云、

老ぬとてなどか我身をせめぎけん老ずはけふにあはまし物か

宮内のかみ又敦頼、こゑをたすけ、り。敦頼主、

をしてるや難波のみつにやくしほのからくも我は老にける哉

又宮内のかみ、

鏡山いざたちよりてみてゆかん年へぬる身は老やしぬると

又清輔朝臣、

おいらくのこんとしりせば門さしてなしとこたへてあはざらましを

いづれをも、人々あひとりに誦しけり。次七聖の歌を講じけり。講師成仲宿禰、讀師頼政朝臣也。序者清輔朝臣、

ちる花は後の春ともまたれけり又もくまじきわがさかりはも

散位藤原敦頼、座

ましてしばし老木の花にこと、はむへにけるとしはたれかまされる

大常卿顯廣王、

年をへて春のけしきはかはらぬに我身はしらぬおきなどぞなる

前石州別駕祝部成仲、

な、そぢによつあまるまでみる花のあかぬは年はさきやますらん

李部侍郎永範、

いとひこし老こそけふはうれしけれいつかはかゝる春にあふべき

予爲^リ三代之侍讀^ト。迫^ル七旬之類齡^ニ。位昇^リ三品^ニ、今列^ス七叟^ニ。故^ニ有^リ此^ノ句^矣。

右京權大夫源頼政、

むそぢあまり過ぬる春の花ゆへに猶おしまる、我命かな

散位大江維光、

としふりてみさびおふてにしづむ身の人なみくゝに立いづる哉

〔現代語訳〕

梢の花が落ちて地面に着いているので、庭の面には春がまだ残っていると見えるほど積もっていて、清輔朝臣が誦し

た(歌)、

数えてもとどまらないものを「疾し」といって、なるほど今年はなんともひどく年をとってしまったものよ

また誦している(歌)、

老いてしまったといつてなぜわが身を責めたのだろうか。もし年老いて生き長らえることがなかったら、今日の

このよき日にあえたであらうか（いや、あえなかつたであらう）

宮内の亮季経と敦頼は、声を合わせてこの歌を誦した。敦頼（の歌）、

難波の港のあたりで焼いた塩が辛いように、つらいことながら私は年老いてしまったことよ

また宮内の亮季経（の歌）、

鏡山に立ち寄つて映して見てみよう、年月を経た私の身はほんとうに年老いたのかどうかと

また清輔朝臣（の歌）、

老いというものが来ると知っていたならば、門を閉ざして、いないと答えて会わないでいたものを

いずれの歌も、人々は互いに共に誦した。次に七叟の歌を披講した。講師は成仲宿禰、読師は頼政朝臣であった。序者の清輔朝臣（の歌）、

散る花はまた来年の春にと待たれるが、二度とめぐつて来ないのは私の盛りだなあ

散位藤原敦頼（の歌）、最上席者

少し待ってくれよ、老木の桜の花にたずねてみよう、経てしまった年月はだれがまざっているのかと（積み重ね

た年月はだれが一番かと）

大常御顕広王（の歌）、

年月を経ても春の景色は変わらないのに、私の身は見知らぬ翁になってしまったことよ

前の石見介祝部成仲（の歌）、

七十四歳になるまで春ごとに見てきた桜の花を見飽きないのは、桜の花が年々一層見事に咲くからでしょうか

式部大輔永範（の歌）、

いやだと思つてきた老いも今日だけは嬉しく思う、いつまたこのような素晴らしい尚齒会が催される春にめぐりあうことができるだろうか

(予、三代の侍読と為り、七旬の類齢に迫る。位三品に昇り、今七叟に列す。故に此の句有り。)

私は三代の侍読となり、七十歳という老齢になった。位は三品に昇り、今こうして七叟に列席している。そのためこの句がある。

右京権大夫源頼政(の歌)、

六十歳を過ぎた春の桜の花であるゆえに、その桜の花を見るにつけても、私の命がより一層惜しまれることよ
散位大江維光(の歌)、

年をとって、水面に錆の浮かぶ入江に沈むような身の上の私が、今日は人並にこの尚齒会に参加するのですよ

〔語釈〕

○かぞふれどとまらぬ物をとしといひてことしはいたく老ぞしにける 『古今和歌集』巻第十七雑歌上に「題知らず」
「読み人知らず」で載る。『暮春白河尚齒会和歌并序』は初句を「数ふれば」とする。初句が「数ふれば」のばあい、
契沖は初、二、三句を続けて解せと説き、香川景樹以降は、初句を四、五句にかかるとみる説が多い。「とし」は「疾し」と「年」の掛詞。○老ぬとてなどか我身をせめぎけん老ずはけふにあはまし物か 『古今和歌集』巻第十七雑歌上に「敏行朝臣」の歌として載り、詞書「同じ御時の殿上に侍にて、男どもに、大御酒賜ひて、大御遊びありけるついでに、仕う奉れる」。○をしてるや難波のみつにやくしほのからくも我は老にける哉 『古今和歌集』巻第十七、雑歌上に題知らず読み人知らずで載り、左注に「又は、大伴の御津の浜辺に」とある。「なには」は「名には」と「難波」、「みつ」は「水」と「御津」を掛ける。○鏡山いざたちよりてみてゆかん年へぬる身は老やしぬると 『古今和歌集』巻第十七雑歌上に載り、左注に「この歌は、ある人の曰く、大伴黒主が也」とある。大伴黒主は伝承。「かがみ」は「鏡」と「鏡山」を掛ける。鏡山は近江国。「鏡」は「みて」の縁語。○おいらくのこんとしりせば門ざしてなしたこたへてあはざらましを 『古今和歌集』巻第十七雑歌上に「題知らず」で載り、左注に「この三つの歌は、昔ありける三人の翁のよめるとなむ」とある。「この三つの歌」とは、「数ふれば」「をしてるや」「老いらくの」の三

首。○あひとりに「暮春白河尚歯会和歌并序」は「あひとともに」とする。○講師 詩会・歌会などで、詩や歌などを読みあげる人。○講師 詩会・歌会などで、作品を整理して講師に渡し、講師の読み上げに誤りがあれば注意する役の人。○序者 詩会・歌会などで、序を書く役の人。○ちる花は後の春ともまたれけり又もくまじきわがさかりはも『統古今集』 卷第十七雑歌上に「尚歯会おこなひ侍ける時 藤原清輔朝臣」として載る。結句「わがさかりはも」は「暮春白河尚歯会和歌并序」に「わがさかりかも」。○ましてばし老木の花にことゝはむへにけるとしはたれかまされる『統千載和歌集』 卷第十六に「題しらず 道因法師」として載り、四句「へにけるとしは」が「へにけむ年は」。「暮春白河尚歯会和歌并序」では結句「たれかまされる」が「たれかまさると」。○な、そちによつあまるまでみる花のあかぬは年はさきやますらん 四句「あかぬは年は」が「暮春白河尚歯会和歌并序」では「あかぬはとしに」。

○いとひこし老こそけふはうれしけれいつかはかゝる春にあふべき 『月詣集』 卷第七に「清輔朝臣の尚歯会をおこなひ侍りける七叟にてよめる 宮内卿永範」として載る。○三代 後白河、二条、六条天皇の三代。○侍讀 天皇や東宮のそばに仕え、学問を教授する学者。またその職。○故「有」此「句」矣。『暮春白河尚歯会和歌并序』では「故有此興矣」。○としふりてみさびおふてにしつむ身の人なみくに立いづる哉 『暮春白河尚歯会和歌并序』では二句「みさびおふてに」が「みさへおほ江に」。「現代語訳」はこの本文に従う。「おほ江」であれば、「多い」と「大江」(大江氏、大きい入江)の掛詞、「なみく」は「人並み」と「波」の掛詞。「波」は「江」の縁語。

(佐藤洋美)

二〇三③ 前大宮大進清輔和歌の尚歯會を行ふ事③

〔本文〕

垣下座につく人々、重家卿・季經朝臣・盛方・仲綱・政平・憲盛・允成・尹範・頼照、をのくみな歌あり。別紙に注^レ之。この日、左馬權頭隆信さはりありてござりけり。又の日をくれりける、

よはひをも道をもしたふわが心ゆきてぞともに花をながめし

返事、

思やる心やきつ、たはれけん面影にのみみえし君かな

大貳下襲のしりをとり、皇后宮亮沓をはかするを感歎して、辨阿闍梨をくりける、

つるのかみかしづくことはいにしへのかせぎのその、ふることぞこれ

返事、

つるのはねかきつくろいしうれしさはしかありけりな鹿のそのにも

〔現代語訳〕

相伴の席につく人々は、重家卿・季経朝臣・盛方・仲綱・政平・憲盛・允成・尹範・頼照、各々歌がある。別紙にこれを記す。この日、左馬権頭隆信はさしつかえがあつて来なかつた。翌日に送った(歌)、

年の上でも歌道の上でもお慕いしている私の心が行つて、あなた方とご一緒に花を眺めたことでした

返事(の歌)、

貴方の思う心が来て戯れたのでしようか、面影だけが現れたあなたであることよ

大貳(重家)、皇后下襲のしりをとつて、(季経が)沓をはかせたのに感動して、弁の阿闍梨が送った(歌)、

鶴のような白髪のお人にかしづくことは、ずっと昔に釈迦が説法に立った鹿野苑が長い年月を経たものですよ、

このように

返事(の歌)、

鶴の羽をかきつくろいお世話していただいた嬉しさは、昔の鹿野苑でのよろこびもかくやと思われました

〔語釈〕

○垣下座 相伴の者の席。○盛方 藤原盛方。保延三年(一一三七)生、治承二年(一一七八)没。藤原顕時の子。

前民部少輔。この当時三六歳。○仲綱 源仲綱。↓二二八。○政平 賀茂政平。生年不詳、治承二年(一一七八)没。神主成平の子。○憲盛 別名藤原明中。藤原敦頼の子。『尚齒会和歌并序』では式部大輔。○允成 祝部弁成。仲成の子。○尹範 藤原尹範。永範の孫。○頼照 頼照の誤り。頼照は生没年未詳。和歌の家六条家の藤原頼輔の猶子。実父は未詳。久安五年(一一四九)山路歌合(散逸)から歌合に出、永万二年(一一六六)藤原重家、仁安二年(一一六七)経盛家をはじめ、藤原実国家、別雷社等の歌合に作者となり、承安二年(一一七八)二二番歌合、建久二年(一一九二)年若宮社歌合には判者となった。○隆信 藤原隆信。康治元年(一一四二)生、元久二年(一一〇五)没。為忠の孫。後白河上皇の近臣として仕えた。越前守、上野介を歴任し、右馬権頭から右京大夫になる。この時三二歳。○さはり 差支え○辨阿闍梨 『尚齒会和歌并序』では性阿上人。大学助藤原雅親。○下襲 束帯の時、半臂の下に着る衣。背後の裾を長く出し、引きずって歩く。○つるのかみかじづくことはいにしへのかせぎのその、ふることぞこれ 鶴しさはしかありけりな鹿のそのにも 「鹿のその」とは、鹿野苑のこと。「しかあり」に「然あり」と「鹿あり」とを掛ける。

【解説】

本文中に「別紙に注之。」とあり、ここでは別紙掲載の和歌を載せる。

暮春見尚齒会和歌

太宰大式重家

老いらくのとしたか人のうちむれていとどよはひをのぶるけふかも

皇后宮亮季経

いまさらにかけしくるまをひきつれてななおいらくところをぞやる

盛方

ちりのこるこずゑのはなにこととはむむかしも見きやかかるためしを

伊豆守源仲綱

ちる花はかしらの雪とつもらなむなます人のうらやましきに

片岡欄宜従四位上賀茂政平

よよをへてすぎにし春をかぞふればはなはひさしき友にぞありける

散位藤原憲盛

おのがよにかかるまとゐはありきやとふべきはなぞねにかへりぬる

散位祝部允成

もろ人のおいのたもとにちるはなをめぐらしとこそ人も見るらめ

学生藤原尹範大卿息

おいらくの人のみみるこのもとはかしらの雪に花ぞまがへる

僧顕昭

たえにけるむかしの春をおもひ出でておいきの花はあはれとや見る

(渡邊 静)

二〇四① 清輔所傳の人丸影の事①

〔本文〕

彼清輔朝臣のつたへたる人丸の影は、讃岐守兼房朝臣ふかく和歌の道をこのみて、人麿のかたちをしらざる事をかなしみけり。夢に人丸来て、われをこふるゆへにかたちをあらはせるよしをつけり。兼房畫圖にたへずして、後朝に繪師をめして、をしへてか、せけるに、夢にみしにたがはざりければ、悦て其影をあがめてもたりけるを、白川院、

この道御のみありて、彼影をめして、勝光明院の寶藏におさめられにけり。修理大夫顯季卿、近習にて所望しけれども、御ゆるしなかりけるを、あながちに申て、つみにうつしとりつ。顯季卿一男中納言長寶卿、二男參議家保卿、この道にたへずとて、三男左京大夫顯輔卿にゆづりけり。

〔現代語訳〕

かの清輔朝臣が伝えた人丸の画像は、(次のような経緯で生まれた。)讃岐守兼房朝臣が深く和歌の道を好んで、人麿の容姿を知らない事を悲しんでいた。(兼房の)夢に人丸が現れて、(あなたが)私を恋慕うので姿を現したということ告げた。兼房は画を描くことに堪能でないので、翌朝絵師を呼んで、教えて描かせたところ、夢で見た(姿)に違わなかったため、喜んでその画像を崇めて持っていたところ、白河院がこの(和歌の)道を好まれて、かの画像を召して、勝光明院の宝藏にお収めになった。修理大夫顯季卿が、(後白河院の)近習であつて(画像を)所望したけれども、御許しがなかったのを、強引に申し出て、とうとう写し取った。顯季卿の一男中納言長實卿、二男參議家保卿、この(和歌の)道に堪能ではないということで、三男左京大夫顯輔卿に譲った。

〔語釈〕

○清輔朝臣 ↓二〇三①。○人丸 柿本人麿。生没年未詳。『万葉集』歌人。歌聖と仰がれた。○讃岐守兼房朝臣 藤原。長保三年(一〇〇一)生、延久元年(一〇六九)没。兼隆男。母は源扶養女。『後拾遺集』初出。○白川院 名は貞仁。天喜元年(一〇五三)生。大治四年(一一二九)没。第七二代天皇。在位は延久四年(一〇七二)〜応徳三年(一〇八六)。後三条天皇第一皇子。母は藤原公成女茂子。和歌を重んじ、『後拾遺集』『金葉集』を撰進させた。『後拾遺集』以下の勅撰集に二九首入集。○勝光明院の寶藏 勝光明院は、白河院が没してから七年後の保延七年(一一三六)完成なので、矛盾する。鳥羽離宮の中の宝藏と考えられている。『十訓抄』は「鳥羽の宝藏」。○修理大夫顯季卿 天喜三年(一〇五五)生、保安四年(一一二三)没。藤原隆経男。母は親国女、白河院乳母親子。正三位修理大夫に至る。歌学家六条家の祖。家集に『顯季集』。○つみにうつしとりつ 元永元年(一一一八)六月一六日

顕季が白河院から人麿影を借り取り、巨勢信茂に写させ、藤原敦光に讀を書かせた影を掲げて、初の人麿影供を行う(『人麿影供記』)。佐々木孝浩「人麿影供年譜稿―鎌倉時代篇―」(『三田国文』一二、一九八九・一二)参照。○中納言長寶卿 承保二(一〇七五)生。長承二年(一一三三)没。藤原。父修理大夫顕季。母大宰大式藤原経平女(通俊妹)。顕輔の同母兄。正三位権中納言に至る。近衛天皇外祖父として贈左大臣正一位。『金葉集』以下の勅撰集に入集。○二男参議家保卿 承暦四年(一〇八〇)生。保延二年(一一三六)没。顕季の二男。○三男左京大夫顕輔卿 寛治四年(一一〇九)生。久寿二年(一一五五)没。顕季の三男。母は藤原経平女。子に清輔、重家、季経ら、猶子に顕昭がいる。白河院に近仕し、正三位左京大夫に至る。『金葉集』二度本に一四首、同三奏本に八首入集した。崇徳上皇の院宣を受け、『詞花集』を奏上。晩年、父から譲られた人麿影を、子の清輔に伝えた。

〔解説〕

『十訓抄』巻一〇第四に類話がある。

橘成季は、建長六年(一二二五)一〇月一六日『古今著聞集』竟宴に人麿影を掲げた(『古今著聞集』第五)。

人麿影供については、山田昭全「柿本人麿影供の成立と展開」(『大正大学研究紀要(文学部・仏教学部』五一、一九六六・三)、佐々木孝浩「人麿影供年譜稿―鎌倉時代篇―」(『三田国文』一二、一九八九・一二)、同「人麿影の伝統―影供の伝統―影供料里海庄をめぐって―」(『和歌文学研究』六〇、一九九〇・四)、同「六条顕季初度人麿影供歌会考」(『国文学研究資料館紀要』二二、一九九五・三)、北原元秀「人麿影供と院政期歌壇」(『古代文化』五一の四、一九九九・四)に詳しい。

(谷 知子)

二〇四② 清輔所傳の人丸影の事②

〔本文〕

兼房朝臣の正本は、小野皇太后宮申うけて御らんじける程に、焼にけり。貫之が自筆の古今も、其時おなじくやけにけり。口惜事也。されば顕季卿本が正本に成にけるにこそ。実子なりとも、此道にたへざらんものにはつたふべからず、うつしもすべからず。起請文あるとかや。件本、保季卿つたへとりて、成実卿にさづけられけり。今は院にめしをかれて、建長の比より影供など侍にこそ。供具は家衡卿のもとにつたはりたりけるを、家清卿傳とりて、うせてのち其子息のもとにありけるも、同院にめしをかれにけり。長柄橋の橋柱にてつくりたる文臺は、俊恵法師がもとよりつたはりて、後鳥羽院御時も、御会などにとりいだされけり。一院御会に、彼影の前にて、其文臺にて和歌披講せらるなる、いと興ある事也。

〔現代語訳〕

兼房朝臣の持っている原本は、小野の皇太后が申し受けて御覧になつてゐる際に、(火事で)焼けてしまった。貫之自筆の古今集も、その時同様に焼失してしまつた。残念なことである。それゆゑ、顕季卿の本が原本になつてしまつたという。実子であつても、この道(歌道)に才能のない者には伝えてはならない、写してもいけない。起請文などがあるのだろうか。この本は、保季卿が伝え取つて、成実卿に授けられた。今は(後嵯峨?)院のもとに召し上げられて保管されてあり、建長年間の頃から影具などが行われているという。供具は家衡卿のもとに伝えられていたものを、家清卿が伝え取つて、亡くなつた後その子息のもとにあつたのだが、(これも)同じ院のもとに召し上げられて保管されてあるという。長柄橋の橋柱でつくつた文臺は、俊恵法師のもとから伝わつて、後鳥羽院の御在位の時も、歌会などの際に取り出されていたという。一院御会の時、かの御影の前で、その文臺において和歌が披講されるといふのは、大層趣あることだ。

【語釈】

○正本 根拠となる原本。○小野皇太后宮 後冷泉天皇の皇后。藤原敏子。関白教通女。○起請文 神仏への誓いを記した文書。○保季卿 承安二年(一一七二)生。没年未詳。藤原北家末茂流。父は太宰大貳重家。母は権中納言藤原成家女。叔父の正三位季経の養子となる。非参議従三位左馬権頭に至り、承久三年(一一二二)出家。『新古今集』以下七首入集。○成実卿 建久二年(一一九一)生。没年未詳。藤原北家末茂流。父は左京大夫親実。非参議従二位に至り、建長八年(一一五六)出家。『新勅撰集』以下に二七首入集。○院 後嵯峨上皇のことか。○建長 一二四九年三月一日(一一二五六年一)○月五日。鎌倉中期、御深草天皇の時の年号。○影供 影像に供物を捧げて祀ること。○供具 供物を入れる器等の道具。○家清卿 生没年未詳。源氏。父は但馬守和歌所開 家長。五位右兵衛尉となる。『続後撰集』以下七首入集。○長柄橋 長柄とは孝徳天皇が築いた都、難波の豊崎宮のあった地。『家長日記』には、少将雅経の献上した長柄橋の柱で、後鳥羽上皇が文台をつくったことが記され、また『続後撰集』六には「九月十三夜十首の歌合に昔の長柄の橋の橋柱にて作りたる文台にて講ぜられて侍りし時名所月 太上天皇」の詞書がある。○文臺 書籍などを載せる台。○俊恵法師 永久元年(一一一三)生。建久六年(一一九五)以前の没。源氏。父は源俊頼。母は木工助教隆女。十七歳で父に死別した後、東大寺へ入室か。白河の自坊による歌壇活動で名声を得、長寛二年(一一六四)の白河歌合等を主催した。『詞花集』以下の勅撰集に八四首入集。○一院御会 後嵯峨院の行った歌会か。

(久利若糸)

二〇五 賀茂神主重保尚齒會を行ふ事

【本文】

養和二年春、賀茂神主重保、又尚齒會を行たりけり。七叟成伸宿禰八十四・勝命法師七十一・俊恵法師七十・片岡

禰宜家能六十五・祐盛法師六十五・重保六十四・敦仲六十二。勝命法師假名序書たりけり。このたびは、ことなる事なかりけるにや。抑七叟の中に僧まじはりたる事おほつかなし。

〔現代語訳〕

養和二年春、賀茂神社の神主重保が、また尚齒会を催した。七人の老人たちの面々は成仲宿禰八十四歳、勝命法師七十一歳、俊恵法師七十歳、片岡禰宜家能六十五歳、祐盛法師六十五歳、重保六十四歳、敦仲六十二歳であった。勝命法師が假名序を書いた。今回（の尚齒会）は、（承安三年の尚齒会と比べて）格別なことはなかったためであろうか。ところで七人の老人たちの中に僧侶がまざっているのはどうしたことであろうか。

〔語釈〕

○養和二年春 一一八二年、春三月。養和は平安末期、安徳天皇在位期間の年号で、一一八一年八月二五日（一一八二年六月二八日）。○賀茂神主重保 元永二年（一一一九）生。建久二年（一一九二）没。賀茂神主重継の男で、母は未詳。嘉応元年（一一六九）四月従四位下に叙せられ、治承元年（一一七）九月権禰宜から神主に補せられる。歌は俊成の門弟といわれているが、俊恵との親交が深く、俊恵の歌林苑の有力な経済的支援者の一人であり、歌風も俊恵の影響が大きい。また、三十六人の現存歌人に百首からなる家集、いわゆる寿永百首を賀茂社に奉納させ、寿永元年一月それらを資料として『月詔和歌集』一二巻を撰んだ。『千載集』以下の勅撰集に一八首入集。○成仲宿禰 ↓二〇三①。○勝命法師 藤原。本名は憲親、俗名は藤原親重。天永三年（一一二二）生。没年未詳。文治三年（一一八七）頃まで生存、七六歳か。従五位上佐渡守藤原親賢の子。従五位下美濃守に至った。『千載集』には一首も入集しなかった。『難千載』を著したとされる。上覚の『和歌色葉』には名譽歌仙に称せられ、『無名抄』の「晴歌一見人事」などにその意見がみられる。『新古今集』以下に六首入集。○俊恵法師 ↓二〇四。○片岡禰宜家能 上賀茂神社の境内撰杜片岡御子神社の神官。成家の子。○祐盛法師 元永元年（一一一八）生。正治二年（一一二〇）八三歳以後没。関係の歌合は永暦元年清輔朝臣家歌合から正治二年の三百六十番歌合・石清水若宮歌合に至る七種が現存する。

重保の『月詣和歌集』の撰に助力し、兄俊恵の歌撰合を破して難歌撰を著す。『千載集』以下に二二首入集。○敦仲藤原。本名は憲成。生没年未詳。従五位上右馬助敦頼（道因）の子で、従五位下式部大輔に至る。『千載集』・『新勅撰集』に三首入集。

〔解説〕

本説話の尚歯会に關して、後藤昭雄氏の『平安朝漢文學史論考』（勉誠出版、二〇一二年四月）には以下のように指摘されている。

養和二年（一一八二）、和歌の尚歯会が賀茂重保によって催された（『古今著聞集』卷五―二〇五）。重保のほか、承安の尚歯会の七叟でもあつた祝部成仲、および勝命、俊恵、賀茂家能、祐盛、藤原敦仲が七叟で、勝命が仮名序を書いている。この尚歯会での和歌は、主催者の賀茂重保が編纂した『月詣集』に三首を採録しているが、残るのはこれだけである。七叟の成仲および垣下の賀茂重政、皇太后宮大進の歌であるが、垣下の二人はこの歌によつてそのことが明らかになる。

以下、『月詣和歌集』に採録された三首を載せる。

養和二年三月に賀茂重保尚歯会おこなひはべりける七叟にてよめる

祝部成仲

むかしにもかはらぬものを花の色は老のすがたのかからましかば（七〇九）

垣下にてよめる

賀茂重政

しめの内ためしにひかんおいらくの花ちりかかるとありきと（七一〇）

皇太后宮大進

立ちよりてみたらし河をけさみればおいのなみにも花は咲きけり（七一一）

二〇六 隆信朝臣、和歌を大納言実國に贈る事

〔本文〕

高倉院の御時、八月廿日比に、人々、神樂をし侍けるが、いとおもしろくて、なごりおほかりければ、なが月の十日あまりの比、隆信朝臣のもとより、實國大納言のもとへをくりける、

あかほしのあかで入にしあか月をこよひの月に思ひいでずや

返し、

たゞこゝにたゞにとこそは思しににげしは月のかひもなかりき

〔現代語訳〕

高倉院の御時、八月二十日比に、人々が神樂の演奏をしたところ、まことに趣深く、忘れがたく思い出されるので、九月の十日あまりの比、隆信朝臣のもとより、実國大納言のもとへ送った(歌)、

明けの明星も神樂のおもしろさも飽きることなく西の空に消えていった暁の月を、今宵の月につけて思い出されませんか

返し(の歌)、

ただここに、このまままでと思っていましたのに、逃げてしまったのは、せつかくの美しい月の甲斐もないことでした

〔語釈〕

○高倉院 保元三年(一一六一)生、養和元年(一一八一)没。第八〇代天皇。後白河天皇の第七皇子。母は平滋子(建春門院)。笛の名手。○神樂 古くは「神遊び」とも称し、『古事記』等の天照大神の天岩戸の故事に起因し、神

(佐藤洋美)

祭に奏せられる歌舞儀礼をいう。○隆信朝臣 ↓二〇三③。井上宗雄氏は、『隆信集』の詞書では実国左衛門督時代(仁安三年七月〜嘉応二年二月)で、隆信が四位になったのは承安四年であるため、その事のあつた時の表記としては「朝臣」を付すべきではないと指摘する。(『平安後期歌人伝の研究』笠間書院一九七八年一〇月) ○實國大納言 藤原実国。保延五年(一一四〇)生、寿永二年(一一八三)没。平安後期の公卿、歌人。家集に『実国集』がある。高倉院の笛の師。『千載集』以下の勅撰集に二三首入集。石川泰水「藤原実国の生涯と風雅」(『国語と国文学』六二の一〇一九八五年一〇月)参照。○あかぼしのあかで入にしあか月をこよひの月に思ひいでずや 「あかぼし」に神楽歌の「明星」を掛けていう。○たゞこゝにたゞにとこそは思しににげしは月のかひもなかりき 「たゞこゝに」は神楽歌の「明星」の歌詞を踏まえる。

【解説】

本文中の和歌は、『隆信集』と『前大納言実国集』に載る。

古今著聞集は『実国集』の詞書とほぼ同文である。『隆信集』の詞書は若干異なっているので次に載せる。

大納言実国左衛門督と申しし時、いざなはれしかば、白河なる所にて、かぐらうたひあそびし程に、暁がたに、ほしになりて、こよひの月はただここにますなどうたひし程に、おもしろかりしなごり、あかずおほえて帰りにしのをち、ふつか三日有りて、月あかかりし夜申しおくりし

以下、神楽歌「明星」を載せる。

吉々利々 千歳栄 白衆等 聴説晨朝 清浄偈 也 安加保之波 明星波 久波也 古々奈利也 名仁志加毛

古与比乃川支乃 多々古々仁万須也 太々古々仁 太々古々仁万須也

(きりきり) 千歳栄 白衆等 聴説晨朝 清浄偈 や 明星は 明星は くはや ことなりや 何 しかも 今

宵の月の たゞここに坐すや たゞここに たゞここに坐すや)

(渡邊 静)

二〇七 中納言實國和歌を三位中將實定に贈る事

〔本文〕

建春門院、皇太后宮にておはしましける時、公卿・殿上人・女房どもさそひて、大井川の紅葉みにむかはれけるに、三位中將實定卿さはる事ありて、とまられたりければ、中納言實國卿よみてつかはしける、

もろともに君とみぬまのもみぢ葉は心のやみのにしきなりけり

返し、

さそはれぬ身こそつられ紅葉、はなにかはやみの錦なるべき

〔現代語訳〕

建春門院が、皇太后宮でいらつしやつた時、公卿・殿上人・女房たちを誘つて、大井川の紅葉を見に向かわれたが、中將實定卿は差しさわりがあつて、とどまりなさつたので、中納言實國卿が詠んで送つた(歌)、

あなた様と一緒に見られなかつた時の紅葉は、心の闇のせいで、闇の中の錦と同じでしたよ(悲しくてよく見えなかつたのです)

返し(の歌)、

お誘いいただけなかつた我が身こそつらいものでしたよ。あなた様が御覧になつた紅葉がどうして闇の錦であり

ましようか(さぞや美しかったですよに)

〔語釈〕

○建春門院、皇太后宮にておはしましける時 建春門院は滋子。康治元年(一一四二)生、安元二年(一一七六)没。平時信女。母は藤原顕頼女祐子。異母姉に平清盛妻時子。後白河院女御。高倉天皇の母。皇太后となつたのは、仁安三年(一一六八)高倉天皇の即位の時である。○大井川 山城国。大堰川とも。丹波国に発して淀川に注ぐ桂川の上流、嵐山のあたりまでを指すことが多い。○三位中將實定卿 藤原(徳大寺)。後徳大寺左大臣。保延五年(一一三九)

生、建久二年(一一九二)没。公能の男。母は藤原俊忠女豪子で、同母の弟妹に実家・実守・公衡・忻子(後白河天皇中宮)・多子(近衛・二条二代后)がいる。嘉応二年(一一七〇)一〇月「建春門院北面歌合」の企画者ともされる。家集に『林下集』。『千載集』以下七八首入集。○中納言實國卿 石川泰水「藤原実国の生涯と風雅」(『国語と国文学』一九八五年一〇月)参照。↓二〇六。○もろともに君とみぬまのもみぢ葉は心のやみのにしきなりけり 錦は紅葉の比喩とされる。「やみのにしき」は、富貴を得ずに帰郷するのは錦を着て夜歩くようなものという朱買臣の故事にちなむ「夜の錦」と同じく、美しくても見えない、価値がないという意味。「蒙求」の「子路負米」の「親失せて後、楚国に行くに官を給へり。職をかさねて家富み、宝豊になりぬ。又かくて親に見えぬ事をのみ、寝ても思ひ、さめても愁へけり、衣の袖の錦繡も、親なければ、誰にか見えんと悲しく」を詠んだ「たらちねの見ぬは心の闇なれば夜の錦に濡るる袖かな」(蒙求和歌)も同様の意味。

〔解説〕

皇后宮の女房もろともに大井川のもみぢ見にまかり侍りしに、三位中将にはかにさはる事ありてとどまりたりしかばいひつかはし侍りし

もろともに君と見ぬまのもみぢばは心の闇の錦なりけり

(実国集・二二八)

故建春門院女房をさそひて大井にもみぢ見に、故藤大納言、左衛門のかみときこえしとき、ゆくとしてさそはれしに、さはることありてまからざりしかば、かの大井より 大納言実国の卿

もろともに君と見ぬまのもみぢばや心の闇の錦なるらん

かへりごと

さそはれぬ身こそつられもみぢばのなにかは闇の錦なるべき

(実家集・一七一・一二二)

子路負米

子路といひし人、家貧しくして、父母を養ふ志浅からず、自ら米を負ひて百里の道を行通ふ、我が身はあふひのみを食ひて、親のくひ物のよからん事をのみ思ひけり、親失せて後、楚国に行くに官を給へり、職をかさねて家富み、宝豊になりぬ、又かくて親にみえぬ事をのみ、ねても思ひ、さめても愁へけり、衣の袖の錦繡も、おやなければ、誰にかみえんとかなしく、倉の内の金玉も、おやなければ、誰が為にか宝とせんと愁へ、百乗の車のかざりもかひなく、千鐘の粟の貯もよしなく覚えつつ、貧しくて親を養ひし時のみ恋しく覚えけるままに、昔のあやしかりし姿にて、あふひのみを食ひて過しける、釜十則鐘なり、一石四斗、十六斛を兼とす

たちねのみぬは心のやみなれば夜のにしきにぬる袖かな (蒙求和歌・一〇七)

(谷 知子)

二〇八 左衛門督實國家歌合の事

【本文】

同卿、左衛門督にて侍ける時、家に歌合し侍けるに、頼政朝臣、立春歌に、

めづらしき春にいつしかうちとけてまづものいふは雪の下水

とよみ侍けるがおもしろくきこえければ、又の朝、亭主、彼朝臣のもとへ申つかはしける、

さもこそは雪の下水うちとけめ人にはこえてみえし浪かな

【現代語訳】

同じ卿が、左衛門督でいらつしやつた時、自邸で歌合を開かれたが、頼政朝臣が、立春の歌に、

ようやく訪れた春に、いつしか雪も解けはじめ、まず聞こえ出すのは雪の下を流れる水の音であるよ

とお詠みになったが、趣深く聞こえたので、次の朝、実国は頼政朝臣のもとへ申し遣わしたことは、

そうであるがゆえ、雪の下を流れる水は解けだすのだろう。その雪解けの水の立てる波が岸を越えて人目に見えるように、(あなたの)雪の下水の歌も、他の人々の歌にまさってすぐれて目立って見えましたよ

【語釈】

- 同じ卿 美国↓二〇六 ○家に歌合 左衛門督美国家歌合「嘉応二年五月廿九日講之」とある○頼政朝臣↓二〇三
① ○亭主 美国○

【解説】

「めづらしき」の歌は、嘉応二(一一七〇)年五月二十九日に行われた「左衛門督美国家歌合」にて、高倉天皇の御前で披露された。

この歌合の題は、「立春」「更衣」「九月尽」「歳暮」「後朝恋」「祝」であり、参加した歌人は、左に大納言隆季・左衛門督美国・左兵衛督成範・前少将公重・前大進清輔・左少将有房・前少納言資隆・右馬権頭隆信・権禰宜重保・前馬助敦頼、右に刑部卿重家・前左京権大夫師光・前皇后宮亮頼輔・右京権大夫頼政・勘解由次官親宗・前中宮大進頼保・中務少輔定長・片岡禰宜政平・俊恵法師・顕昭法師である。また、講師は右京権大夫頼政、読師は右馬権頭隆信、そして判者は太皇太后宮前大進清輔であった。

この歌は「立春」題の第四番、左の公重の詠んだ歌「七賤のやどにたてならべたる門松にしるくぞみゆる千代の初春」に対抗して右の頼政が詠んだものであり、結果として頼政が勝利した。その際判者の清輔は、「左、すゑあしくもきこえぬを、門松にといやしきやうにきこゆる、申さるめり、右、をかしといひあはれたるを、水物いふといはんことやいか、と申せば、こゑにつきていはるにこそ、などてか、と侍れば、右勝」と述べている。美国はこの評価を受けて「さもこそは」の歌を詠んだのだろうか。

(久利若糸)

二〇九 大納言實國少將隆房の車の風流に感じ其父に歌を贈る事

〔本文〕

少將隆房、賀茂祭使つとめけるに、車の風流よく見えければ、又の朝大納言實國、父の大納言隆季のもとへ申をくり侍る、

色ふかき君が心の花ちりて身にしむ風のながれとぞみし

返し、

子を思心の花の色ゆへや風のながれもふかくみえけむ

〔現代語訳〕

少將隆房が、賀茂祭の(近衛)使をつとめたときに、車の風流が素晴らしく見えたので、翌日の朝大納言實國が、(隆房の)父の大納言隆季のもとへと申し送った(歌)、

深い色をした花が散るように、あなた様の深い愛情の花が伝わって、身にしみるように心を打つ風の流れ、車の

風流のせいだと感銘を受けました

返し(の歌)、

子を思う私の心の花の色、つまり愛情のせいでしょうか、風の流れ、つまり(車の)風流も深く見えたのでしょ

うか

〔語釈〕

○少將隆房 藤原。久安四年(一一四八)生、承元三年(一一〇九)没。大納言隆季の男。母は従三位藤原忠隆の女。

承安元年(一一七二)までに清盛の四女と、後に高階泰経の女と結婚。永万二年(一一六六)右少將、治承三年(一一七九)右中將となり、藏人頭、左兵衛督、檢非違使別当を経て、権大納言正二位に至る。『平家物語』『建礼門院右京大夫集』

『艶詞』に登場する。歌人としては嘉応二年(一一七〇)十月十六日『建春門院北面歌合』、治承二年(一一七八)

三月十五日『別雷社歌合』、同年八月『日吉社五首歌合』、建久六年(一一九五)正月二十日『民部卿家歌合』、建久九年『御室五十首』、正治二年(一二〇〇)『正治二年院初度百首』、同年十二月『石清水若宮歌合』、建仁二年(一二〇二)五月二十六日『鳥羽城南寺影供歌合』、建仁三年(一二〇三)六月十六日『和歌所影供歌合』、同年十一月二十三日藤原俊成九十賀歌会などに出詠している。建永元年(一二〇六)六月二十三日出家し、寂恵と号する。著作として、『隆房集』(『艶詞』)、安元二年(一一七六)三月四日から六日にかけて行われた後白河法皇の五十の賀を記録した『安元御賀記』、『群書類従』所収『朗詠百首』などがある。『千載集』以下に三四首(重複歌があるので、実数は三十三首)入集。祐野隆三『中世自照文芸研究序説』(和泉書院、一九九四年)、谷知子『中世和歌とその時代』(笠間書院、二〇〇四年)参照。○賀茂祭使 賀茂祭の路頭の儀の中心的存在であった近衛使のこと。天皇の名代で、衛府の中將、もしくは少將がつとめた。隆房が近衛使をつとめたのは、承安元年(一一七一)四月一七日のこと(『玉葉』)で、右少將時代であった。○車の風流 車に葵などの飾りつけを施すこと。谷知子『賀茂祭と和歌』(『和歌文学研究』一〇七、二〇一三年二月)参照。○大納言實國 ↓二〇六。○隆季 藤原。四条家の祖。大治二年(一一二七)生、元暦二年(一一八五)没。隆房の父。正二位権大納言太宰帥に至る。『建春門院北面歌合』『別雷社歌合』などの歌合や『久安百首』に出詠。『詞花集』以下の勅撰集に一一首入集。平藤幸「藤原隆季像の考察」『玉葉』からの照射を軸に―(『軍記と語り物』三九、二〇〇三年三月)、野本瑠美「藤原隆季の和歌活動」(『島根大学法文学部紀要 言語文学科編』三三、二〇一二年三月)参照。○色ふかき君が心の花ちりて身にしむ風のながれとぞみし 「心の花」は親としての愛情、「風のながれ」は風流のこと。

〔解説〕

この贈答歌は、『実国集』に見える。

隆房の少將祭の使にたち侍りしに、車の風流よくと侍りしかば、またの日のあした、父の大納言のもとにいひつかはし侍りし

色ふかききみが心の花ちりてみにしむかぜのながれとぞみし (五七七)

返し

大宮大納言

かをおもふこころのはなの色ゆゑにかぜのなごりもふかくみえけむ (五七八)

賀茂祭の近衛使の流れを簡単にまとめておく。

舞人・陪従の装束の調達↓出立の儀↓宮中儀↓路頭儀↓還饗

たいへん費用のかかる役目で、経済力のある父が親族が後見となった。『栄花物語』は、子息の頼通(『御堂関白記』によれば、史実は雅道)が近衛使に任せられ、道長が華やかな風流を尽くして飾り立て、棧敷で我が子の晴れ姿を見守る様子が描かれている。このように賀茂祭の近衛使に任せられることは、一族の誇りであり、成功させることは、親や親族の重要な責務であった。谷知子「賀茂祭と和歌」(『和歌文学研究』一〇七、二〇一三年二月) 参照。

(谷 知子)

二一〇 修理大夫經盛和歌を大納言實國に贈る事

〔本文〕

治承の比、人々安藝のいつく島へまいられけるに、風あらくて高砂のへんにありとき、て、修理大夫經盛、實國大納言のもとへ申をくり侍ける、

とまりする湊の風もけあしきに浪たかさごのうらはいかにぞ

返し、

高砂の浪のか、らぬおりならば風のつてにもとはれましやは

〔現代語訳〕

治承の頃、人々が安芸の厳島神社へ参詣なさったときに、風が荒くて高砂のあたりに(実國が)いると聞いて、修

理大夫経盛が、実国大納言のもとへ申しおくれた(歌)、

私が滞在している湊(港)の風も吹き荒れておりますのに、あなた様がいらっしやる波が高いという高砂の浦は
どんなにか荒れていることでしょう

返し(の歌)、

高砂の浦の高い波がかからないときであれば(このような折でなければ)、あなた様は風がつて、物のついでに
も声をかけてくださらなかったでしょう

〔語釈〕

○治承の比 「治承」は高倉天皇・安德天皇の時代。安元三年(一一七七)八月四日に改元、治承五年(一一八一)七月一四日に養和に改元。本説話は『古今著聞集』巻第一や『玉葉』によれば、治承三年(一一七九)三月二十九日のこと。○安藝のいつく島 厳島神社。平清盛は海上守護神として厚く信仰し、その造営に大きく関わった。○高砂 兵庫県高砂市。「高砂の松」で有名な歌枕。○修理大夫経盛 平経盛。天治元年(一一二四)生、元暦二年(一一八五)三月二十四日壇ノ浦の戦で入水。父は平忠盛、母は村上源氏顕房五男信雅の女。平清盛の異母弟。大宮権大進・左馬権頭・大宮亮・大宮権大夫・修理大夫・参議に任ぜられ、安芸・伊賀・若狭・讃岐・備前権守を歴任。本説話の頃は散位、大宮権大夫で五十六歳。万永二年(一一六六)五月の経盛家歌合以降、少なくとも四度以上歌合を主催。家集に『経盛集』、『千載和歌集』以下に一二首入集(読人知らず一首)。井上宗雄『平安後期歌人伝の研究 増補版』(笠間書院、一九八八年一〇月)参照。○實国大納言 ↓二〇六。○とまりする湊の風もけあしきに浪たかさこのうらはいかにぞ 「湊」は大輔田泊を指す「兵庫湊」という地名と、「港」を掛ける。「浪たかさ」は「高砂」と「浪高」(波が高いこと)とを掛ける。

〔解説〕

本説話の贈答は『経盛集』と『実国集』にもある。『経盛集』には、

播磨なるところに侍りし時、藤大納言実国御殿島社へまうで侍りけるに、かぜあらくて高さごととききてよみてつかはしける

とまりするせとのかはだにけはしきになみたかさごのうらはいかにぞ (九六)

かへし

大納言実国卿

たかさごのなみのかからぬをりならばかぜのつてにもとはれましやは (九七)

とあり、『実国集』には、

ひとびとにいぎなはれていつくしまにまゐり侍るに、かぜあしくて高砂の辺にありとききて、すりの大夫のもにより

とまりするみなとのかぜも気あしきをなみたかさごの浦はいかにぞ (九九)

かへし

たかさごの浪のかからぬをりならばかぜのつてにもとはれましやは (一〇〇) とある。

また、本説話と同日の記事が『古今著聞集』巻第一と『玉葉』にある。『古今著聞集』巻第一、二〇話には、

同三年三月晦日、嚴島にまいるとて出でられにけり。大納言實國卿・中納言實家卿など伴侍けるとぞ。此日、中御門左府もまゐりたまひたりけり。三條左大臣入道、其時大納言なり。六條の太政おとゝの中將にて侍りけるもおはしける、伴申されけり。此たびのことにや、中將、彼島の寶前にて太平樂の曲まはれけるが、おもしろかりける事也。

とあり、『玉葉』(『九条家本玉葉 六』、宮内庁書陵部、二〇〇〇年三月、治承三年三月二十九日条)には、

此日左大臣・左大將、(実定、)大納言、(実房、実国、)中納言、(実家、)等参詣安芸国伊都伎嶋社、中納言賢賢

追参向云々、

とある。この日は、左大臣経宗、左大将実定、大納言実房、実国、中納言実家等、さらに中納言資賢が「官位昇進祈願のために厳島へ出立」したとされ、「平氏の氏神でもある厳島神社に参詣することは、清盛への追従でもあった」と指摘される（『新潮日本古典集成 古今著聞集上』二一〇話、頭注）。

（佐藤洋美）